

氏名(本籍)	ろっほんぎ たけし 六本木 健 志(群馬県)		
学位の種類	博 士(文 学)		
学位記番号	博 乙 第 1664 号		
学位授与年月日	平成12年11月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	歴史・人類学研究科		
学位論文題目	越後南魚沼における百姓生業の展開		
主査	筑波大学教授	文学博士	大 濱 徹 也
副査	筑波大学教授	理学博士	石 井 英 也
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	伊 藤 純 郎
副査	筑波大学助教授		浪 川 健 治
副査	筑波大学教授	農学博士	佐 藤 常 雄

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、越後南魚沼(現新潟県南魚沼郡)における百姓のありかたを、米が大量に換金商品化された時代に成立した米生産のムラに営まれた生業の諸形態を個別具体的解析し、江戸事態の百姓像を提示せんとした7章10節からなる作品である。

序章「越後南魚沼の特性にみる問題の所在」は、米作地域南魚沼をめぐる村落史研究が後進地論や越後縮という織物特産品を中心とする農村工業の生成にかかわるマニファクチャー論として論究されてきた研究史を批判し、田畑耕作を生業の基底とする村落像の一面性を克服するためにも、村で多様に営まれていた百姓生業の展開を読み解くことが課題であるとの視座を提示したものである。

第一章「村における水田造営」は、17世紀の水田造営にはじまる南魚沼における村落形成の具体相を、「牢人百姓の移入」による水田造営の盛況をとおして把握し、魚野川氾濫原の広域的開発をになう新田地主と百姓の関係がもたらした村の姿を「開発による村落の変容」として論じ、百姓が金銭遣いにながされて諸種の分業にかかわっていく状況を、幕府領会津藩預り地という条件と重ねて検討している。

第二章「生活の諸相」は、他地域との交易関係や三国山脈の林産資源がもつ意味に着目し、自給自足的生活にとられず、三国街道の宿継ぎ場として多様に「生活物資の調達」に励む百姓の姿を活写し、分業による百姓家の増大が、生活と生業をささえている山稼ぎをめぐる入会山野の利用にかかわる確執を生み、村落内の対立がうながされていくことを「入会山利用をめぐる確執」で検証している。

第三章「村内分業の発生」は、村内における分業の発生過程を解析すべく、村運営を担っていた大高持百姓が「金納年貢の発生」をふまえ、村外との交易で金銭遣いが拡大し、村内の次三男が販路開拓者となり、各種の商品生産が同族経営として展開される様相を「金銭遣いと生業」で提示する。その独立への道は、南魚沼の林産資源が魚野川を通じて越後内の城下町・在村で換金商品化され、林産輸送にかかわる米生産の村に展開する分業が大高持百姓を中心とする仕込みにかかわるなかで可能となった相貌を、「三国山脈の林産物をめぐる仕込みの形成」で解き明かしている。

第四章「在村金融の展開」は、織物特産品の成立基盤を百姓生業の展開をふまえて検討すべく、縮生産が村で暮らす百姓家の婦女子によって営まれ、年間1～2反の生産しかないことをふまえ、南魚沼関村の九左衛門家の

経営を分析することで、百姓家の生業が多角的な耕作とともに、多様な諸稼ぎを組み入れた複合的な形態であることを、縮生産の担い手である婦女子の日常生活までも視野に入れ、「百姓九左衛門家の実像」として提示する。こうした分業と金遣いは、江戸からの多額な縮買付け金の流入により、百姓に「甚驕」の風潮を生み、質取り金融を営む百姓の土地集積をもたらした。商人地主が生まれる一方、複合的な生業でかまどを独立させた「小前」と称する百姓家が形成され、織物特産物の生産基盤を担っていく様相を「商人地主の軌跡」としてあとづけている。

第五章「生活の再編をめぐる確執」は、江戸からの受注が下降する中で、特産物生産が行きづまり、組合村が破綻し、商人地主と「小前」百姓の対立による打ちこわしがおこる村の様相を「縮生産下降の余波」で把握し、「村における経済生活」で村再編の方途を、塩沢村の商人地主牧之鈴木儀三治が『夜職草』で説いた「勤勉」と「儉約」の世界として、『夜職草』に込められた牧之の思想」に読み取り、金銭遣いに支えられた村の暮らしを維持するために、北関東の養蚕・製糸を営む他邦稼ぎが一般化し、そこに形成された分業圏と結びつくなかに南魚沼の経済活動が新たな段階に入っていく時代相を「越後男」にみる他邦稼ぎの形態」として描いている。

終章「越後南魚沼の村における百姓生業」では、南魚沼の百姓が米生産の村に足場をおき、換金商品となった米をふまえ、金銭遣いに主体的にかかわるなかで諸種の分業を営み、多様な百姓生業の世界に身を投じた状況を総括する。百姓は、村に足場を置き、田畑耕作にのみ限定されない多種多様な生業を複合的に営むことで成立していたことが確認されている。

ここに提示された世界は、「士農工商」の四民論に呪縛された「百姓」農民論から説かれる江戸時代像に再考をせまり、多様な百姓生業にささえられた村の営みをふまえた村落史研究が新しい江戸自体像を探求する上で欠かせない作業であることを説かんとしたものである。

審査の結果の要旨

本論文は、江戸時代の農村史研究を問い質すべく、越後南魚沼郡で営まれた百姓生業のありかたを個別具体的に検証し、旧来の農村史を規定してきた生産力論による地帯区分や貧窮分解を旨とする江戸時代像に修正をせまり、金遣い経済の下で村が時代に応じた諸活動をなし、多種多様な生業を複合的に営んできたことを検証した意欲的な作品である。

その第1は、越後南魚沼郡における百姓の姿を時代のなかに位置づけ、米生産に規定されながらも、縮生産をはじめとする諸稼ぎに従事し、金銭遣いがもたらす豊かな暮らしを求めて苦闘する百姓像を個別具体的に解析したこと。

第2は、江戸時代の百姓は、自律的な生活をめざし、時代に相応しい多種多様な家業を営み、金銭遣いのなかで暮らし、契約の観念で村をこえて生きる場をもっていたことを明らかにしたこと。

第3は、日本の江戸時代が負わされてきた「貧しく暗い農民生活」像に対峙し、金遣いにささえられた村の暮らしが「甚驕」といわれるほどに町場の気風に影響され、金銭稼ぎに身を投じていた百姓の世界を描いたこと。

本論文は、越後南魚沼における百姓の存立を、その生業形態を具体的に解析した意欲的な作品として評価しうるものの若干の問題も残されている。第1は、「金銭遣い」といわれた百姓の経済活動を、江戸時代の百姓像として、一般化していくための問いかけにやや弱いこと、第2は、米生産の村といわれる村の構造をふまえ、縮という特産品と米の特産化をめぐる相克が村の暮らしに投じた陰翳を読みとく眼くばりが望まれること。

本論文は、これらの課題が残されているものの、百姓の生業を個別具体的に検証するなかに、江戸時代の農民生活の実態を解き明かした作品として、学界に大きな地歩を占めるものと認められる。

よって、著者は、博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。